Compassionate Communities 研究会 2021年12月20日
＊ウェブ公開用に編集したものになります

# 難民をめぐる包摂／排除と〈共生〉
## ―人類学の視点から―

久保忠行（大妻女子大学）

# 報告の内容と流れ

- 難民研究／文化人類学の視点から、共生についての話題と論点を提供すること。
- 報告者の調査による事例は、スポットライト的に紹介する。

1. 自己紹介、研究のきっかけ
2. 「共生」の論点
3. 難民をめぐる包摂／排除
4. まとめ

# ミャンマー難民

ミャンマーを出身とする難民

ミャンマーには135民族？

イギリスから独立。

ビルマ民族を中心とする国家からの分離独立や自治をめぐる内戦（ビルマ軍と諸民族のゲリラ）。

1980年代半ば～ タイ側へ難民

・・・

2005年～　米国など先進諸国への第三国定住

## Refugee Camp Population: November 2021

| Temporary Shelters | TBC Verified Caseload[1] | | | TBC Assisted Population[2] | MOI/ UNHCR Verified Population[3] |
|---|---|---|---|---|---|
| Province/Camp | Female | Male | Total | Total | Total |
| **MAE HONG SON** | | | | | |
| Ban Mai Nai Soi | 3,892 | 3,918 | 7,810 | 7,504 | 8,118 |
| Ban Mae Surin | 968 | 1,009 | 1,977 | 1,905 | 1,937 |
| Mae La Oon | 4,320 | 4,186 | 8,506 | 8,337 | 8,961 |
| Mae Ra Ma Luang | 4,596 | 4,439 | 9,035 | 8,699 | 9,880 |
| **Subtotal:** | **13,776** | **13,552** | **27,328** | **26,445** | **28,896** |
| **TAK** | | | | | |
| Mae La | 15,324 | 14,386 | 29,710 | 28,793 | 34,210 |
| Umpiem Mai | 4,461 | 4,340 | 8,801 | 8,437 | 10,707 |
| Nu Po | 3,959 | 3,673 | 7,632 | 7,506 | 9,420 |
| **Subtotal:** | **23,744** | **22,399** | **46,143** | **44,736** | **54,337** |
| **KANCHANABURI** | | | | | |
| Ban Don Yang | 1,140 | 1,124 | 2,264 | 2,246 | 2,440 |
| **RATCHABURI** | | | | | |
| Tham Hin | 2,747 | 2,421 | 5,168 | 5,044 | 5,738 |
| **Total Refugees** | **41,407** | **39,496** | **80,903** | **78,471** | **91,411** |

**Refugees by Ethnicity**

| | |
|---|---|
| Karen | 80.60% |
| Karenni | 9.50% |
| Burman | 3.30% |
| Mon | 0.60% |
| Other | 5.90% |

**Refugees by Age Groups**

| | |
|---|---|
| New Born < 6 months | 0.6% |
| 6 months< 5 years | 9.6% |
| 5 years < 18 years | 32.9% |
| >= 18 years | 56.9% |

**Notes**

出典：https://www.theborderconsortium.org/wp-content/uploads/2021/12/2021-11-November-map-tbc-unhcr.pdf

# 共生にかかる論点

1. お互いに～　ではない

2. 誰がマジョリティかは文脈に依存する

3. 共生はストレスであること（例：大島［2019］）

4. 共生とは？　例えば英語では？

# Kyouseiについて

- coexsistence, living together, symbiosis, conviviality ではなく、共生学（Kyousei Studies）[志水ほか編 2020]

- A（マジョリティ）、B（マイノリティ）

- A＋B＝A（同化）でも、A＋B＝A＋B（多文化主義）でもなく、A＋B＝A’＋B’＋ α（新たな制度や価値観）

# Symbiosisについて

生物学的な「共棲」と訳されることが多いが･･･

ジェームズ・スコット 『ゾミア：脱国家の世界史』［スコット 2013］
原題：The Art of Not Being Governed（統治されない技法）

- ゾ＝奥地、山地での暮らし ミア＝人々（いくつかのチベット・ビルマ系言語に共通）
- 山地民は未開人ではなく、国家の支配から逃れた人

- 平地国家の繁栄を支えたのは、交易品となる山地の林産物

- 交易や交換関係の共生、山地民と平地民の対話的関係を指す語として、Symbiosisを使用

# Conviviality について

「饗宴」とされることが多いが･･･

イリイチ『コンヴィヴィアリティのための道具』［イリイチ 2015］

- 人間をモノ化、道具化する文明社会に対する批判をベースにした、自立共生（＝訳者）をコンヴィヴィアリティ
- イリイチが批判するのは、人間をモノ化する道具（近代文明）。

# Conviviality について

カルチュラル・スタディーズの議論 [バック 2015]

- マイノリティである移民が都市社会での「ともに生きること（conviviality）」を実現するための道具立て（≒手段）と能力

- 人びとを文化的起源に還元しない。日常的な行為に着目する。

- コンヴィヴィアリティのための道具
  → マイノリティが実践するともに生きるための手段と能力

# Co-existenceについて

共在

- ともに居合わせると、直接関係していなくとも相互に関連し合っている［ゴッフマン 1974］

- 衣食住をともにするかぎり同じ地域社会にいる。

- 好き嫌い、積極的に交流する、しない、存在を知っている、知らないにかかわらず、生活の足場、場所、生活圏をともにするかぎり「無関係」ではいられない［町村 2006；久保 2014］。

# 〈共生〉について

- 生活世界全体には、それぞれの位相が混在しているのでは？
- 共生を論じるさいに、どの位相なのか？
- 総じて〈共生〉と表記
- 身体を介したかかわり契機としてうまれる、創発的なもの

# 難民問題とは？

- 国民国家と難民は不可分、国家観や国民意識を問いなおすこと。

- 国連総会：包括的難民支援枠組み

（CRRF: Comprehensive Refugee Response Framework）

1. 多様なステークホルダーのかかわり
2. 革新的な人道支援 ～民間セクターとの連携、多様な投資形態など
3. 包括的なアプローチ ～人道支援と開発援助の連携など
4. 長期的な解決策の計画／出身国・受け入れ国・第三国の責任と国際社会による支援

https://www.unhcr.org/jp/global-compact-on-refugees

# 包摂／排除の着眼点

国連的な発想の問題点

- 国民国家はデフォルト、難民は負担
  - A’＋B’＋ α（新たな制度や価値観）はない。

排除と包摂は二項対立、排除 or 包摂ではない［内藤・山北 2013］。

- 包摂の試みがかえって排除を正当化すること。
  - 自立支援が新たな排除をうみだすホームレスの現場［山北 2010］
  - 難民事業本部は模範難民を表彰：「依存」する難民の排除を正当化［久保 2014a］
    - A+B＝Aであるべき

# 難民研究の傾向

全体

- 学際研究の必要性。多岐にわたる。
- 地域やトピックの事例研究。
  - 難民としての経験、法制度は個別具体的なものだが、いかに理論化？
- 強制移動研究（forced migration studies）に包括されることも。

人類学的な研究

- 自発か強制かは、分析者の視点による。
- 国連もまた難民をつくる主体
- 官僚機構がつくる難民像とは異なる実像や実践［Malkki 1995a,b］［久保 2014b］

# 最近のトレンド：難民の経済活動への着目

難民に対する以下の認識は誤りである［Betts et al 2014, 2017］

1. 経済的に孤立しており economically isolated
2. 負担で a burden
3. 経済的に一枚岩で economically homogeneous
4. （最新）技術に疎く technologically illiterate
5. 人道支援に依存している dependent on humanitarian assistance

- 国益を考慮し、政治的に実現可能な枠組みを模索する研究。
- 難民の（経済的）自立とレジリエンス［村橋 2021］

# 難民の経済活動に着目する研究の問題点

新自由主義的な統治へ

- 市場化＋競争＋自己責任＋柔軟性＋費用対効果とセット
- 支援者の負担、支援依存を減らすための標語

- ホストとの共存を標榜しつつも、難民個々人の努力と変容を求めるもので、障害の個人モデルの発想に近い。

# 日本社会と難民

〇〇難民の造語（ネットカフェ、出産、買い物、結婚、介護、がん、ワクチン･･･）

- 困っている人
- 本来はあるはず（べき）の権利、関係性、資源、情報、サービス、人、モノ、場所へのアクセスなどがない or 剥奪。

- 研究の用法としては不正確。日本語で「難民」を考えるには示唆的［久保・阿部 2021］
  - refugee: re- の接頭辞とfugere（逃げる・のがれる・免れる・避ける）。
    留まることが困難なので逃げる、能動性［市野川・小森 2007］
  - 難民：難にぶつかる、遭遇すること。受動性。
  - ビルマ語：ドウッカーデー（困った目にあう、災難にあう）

# 難民への「共感」はうまれるか

新自由主義的な統治と自己責任、模範難民の問題点

安全保障化（securitization）の問題点［バウマン 2017］

- 不安（insecurity）なものは、治安機関の管轄へ。
- 不安をもたらす移民や難民は、道徳的責任の対象外に（非人間化）。
- 生活苦の国民（≒〇〇難民）にとって、さらに困難な移民・難民は、（国民としての）尊厳と自尊心を取り戻すための対象。
- レイシズム、外国人排斥、愛国主義を掲げる政党や運動の躍進へ

- 福祉排外主義：福祉国家が移民を守る → 移民から福祉国家を守る

# 難民の生活世界（タイ）

- 自生する食用植物、生態環境の利用。
- 第三国からの送金
- 難民キャンプ周辺村でのインフォーマルな就労。
- 難民と周辺村民の相互依存的な関係。
  - 必要不可欠な労働力という点でsymbiosis?

## マジョリティとの関係（フィンランド）

再定住した難民

- 多くがマンションに居住
- 定住当初「死臭がする」と近隣住民から通報
- 実際は料理のにおい。それ以降の苦情はなし。

共在するなかで A＋B＝A’ ＋ B

アメリカの難民集住地

- 臭いに対する苦情から「白人棟」と「難民棟」に分けられた。

→ A＋B ＝A が A＋B＝A＋Bへ

# 余剰をうみだす（フィンランド）

- 自生するベリーを採集。
- 林産物には非課税
- ラジオ、雑誌への広告、Facebook、Google mapの活用
- 山地民の生活スタイル＋新しいテクノロジー［久保 2019］

# 隣人と触れあう、住まいをホームにする

コンヴィヴィアル（共に生きる）ためのマイノリティの能力

- 再定住先のフィンランドで高齢者の庭の手入れをする。
- 身体を介して関わること。マイノリティの努力義務とは異なる

# 故郷の味を再現する（アメリカ）

渡米した難民

- 第一世代の生活様式は、キャンプ暮らしとの連続性（例：料理の再現）

なぜ可能か？

- 先住のHmong難民やインドシナ難民が食糧生産と流通網を整備。

- ローカルな境界を越えた繋がり、「ホームの構築」などの点で、Convivialなもの？

# まとめ

〈共生〉の諸相

難民キャンプと周辺村の関係から

- 長期間にわたるco-existence、相互依存としてのSymbioticな共生？
- 難民キャンプの目的外利用＋送金による難民が果たす役割の変化のような新しい関係性α

第三国での暮らし

- フィンランドとアメリカのマンション暮らしは対照的。
- マイノリティの生き方、ローカルな境界を越えた繋がり、ホームの構築としてのconviviality

日本の課題

- 日本社会の問題だが他者化され、排除の論理になる〇〇難民の問題
- 身体がかかわることの重要性（研究会との共通点？）

参照文献


- 市野川容考・小森陽一. 2007.『難民』岩波書店.
- イリイチ、イヴァン 2015『コンヴィヴィアリティのための道具』筑摩書房.
- 大島隆. 2019. 『芝園団地に住んでいます：住民の半分が外国人になったとき何が起きるか』明石書店.
- 久保忠行 2014a 「難民の受け入れの「意図せざる排除」―〈共在〉のパラダイムに向けて―」 『理論と動態』(7)：117-133
- ーーーー 2014b『難民の人類学』清水弘文堂書房.
- ーーーー 2016 「分析概念としての〈難民〉：ビルマ難民の生活世界と難民経験」『多配列思考の人類学：差異と類似を読み解く』白川千尋・石森大知・久保忠行（編著）pp.247-266、風響社.
- ーーーー 2019.「福祉国家における難民の再統合：ビルマ（ミャンマー）難民のフィンランドへの第三国定住」『グローバル化する＜正義＞の人類学ー国際社会における法形成とローカリティ』 細谷広美, 佐藤義明（編著）、pp.281-308、昭和堂.
- 久保忠行・阿部浩己 2021.「難民研究の意義と展望」『難民研究ジャーナル』10：2-16.
- ゴッフマン、アーヴィング. 1974.『行為と演技』誠信書房.
- 志水宏吉ほか編. 2020.『共生学宣言』大阪大学出版会.
- スコット、ジェームズ. 2013. 『ゾミア：脱国家の世界史』みすず書房.

- 内藤直樹・山北輝裕（編著）. 2013.『社会的包摂/排除の人類学: 開発・難民・福祉』昭和堂.
- バウマン、ジグムント.2017.『自分とは違った人たちとどう向き合うか—難民問題から考える』青土社.
- バック、レス. 2015.「人種差別主義の廃墟のただ中にある多文化的コンヴィヴィアリティ」『年報カルチュラル・スタディーズ』.
- 町村敬志. 2006.「グローバリゼーションと地域社会」『地域社会学の視座と方法』似田貝香門監修・町村敬志（編）pp. 46-66, 東信堂.
- 村橋勲. 2021.『南スーダンの独立・内戦・難民ー希望と絶望のあいだ』昭和堂.
- 山北輝裕. 2010.「野宿者と支援者の協同——「見守り」の懊悩の超克に向けて」『ホームレス・スタディーズ』青木秀男(編著) pp. 262-284,ミルネヴァ書房.
- Betts, Alexander et al. 2014. Refugee Economies: Rethinking Popular Assumptions. Refugee Studies Centre, Oxford University.
- ーーーー. 2017. Refugee Economies: Forced Displacement and Development. Oxford University Press.
- Malkki, Liisa H. 1995a. “Refugees and Exile: From “Refugee Studies” to the National Order of Things.” Annual Review of Anthropology 24: 495–523. Annual Reviews.
- ーーーー. 1995b. Purity and Exile: Violence, Memory, and National Cosmology among Hutu Refugees in Tanzania. University of Chicago Press.